



《釈文》

在陣為^レ届^ニ

祈念之守札

并五明・墨一到

来、祝着候、委

細全阿弥可^レ申

也

九月十一日御黒印

極楽院

本文之通無^ニ相違^一者也

賞珉印

《読み下し文》

在陣に祈念の守札並びに五明・墨を届けんが為の到来、
祝着に候、委細は全阿弥申すべき也、

九月十一日 御黒印

極楽院

本文の通り相違無き者也、

賞珉印

《用語》

【在陣…ざいじん】陣地の中にいること。在宮（「日本国語大辞典」、以下「日国」）

【祈念】神仏に、ある願いごとがかなえられるよう祈ること。祈願。（「日国」）

【守礼…しゅれい】神仏の霊がこもり、人を加護すると信じられる札。災害や病気などを避け、身の安全をはかるために、社寺から授かり受けるもの。いつも身につけていたり、門戸などに張ったりしておくことが多い。まもり。おふだ。

【五明…ごみょう】扇

【祝着…しゅうちゃく】喜びに思うこと。満足に思うこと。また、そのさま。

【委細…いさい】細かに、くわしいこと。こまごまとした、くわしい事情。詳細。

【全阿弥…ぜんあみ】天正八年（一五八〇）内田正次が三十四歳の時に命によつて全阿弥と号し、慶長十一年（一六〇六）駿州で六十歳で没した。内田氏はもと今川家臣で、のち徳川家康に仕えた。金地院崇伝らとともに家康の宗教行政の担当者の一、寺社行政の取次役を務めた（国史辞典）

【極楽院…ごくらくいん】明治初年廃絶。和田山極楽院清涼寺と号し、本山派の修験宗に属した。本尊は不動明王。箕輪城主長野業政の帰依により良雲が開山し、真言宗であった。二代鎮良は長野業盛の遺児亀寿丸で、同城落城後良雲に養育され、のち聖護院道澄親王の弟子となった（天和二年「由緒朱印高書上」・文政一〇年「極楽院法系」長野家蔵）。極楽院は武田氏から前和田のうち一四貫五〇〇文、下箕輪のうち三貫文を与えられており（永禄一年正月二三日付「武田信玄定書」中沢文書ほか）、西上野年行事職（天正四年六月一七日付「武田勝頼定書」住心院文書）、上野国総山伏

中年行事職を勤めている（同一〇年三月二八日付「滝川一益判物写」極楽院文書）。北条氏の勢力下に入っても知行分は変わらず（同一〇年七月五日付「北条氏邦定書」同文書）、榛名山麓修験の中心の一となった。江戸時代には二六石余の寺領があった。

【賞珉…しょうみん】住心院十二代、広橋豊忠の孫。宝暦九年（一七五九）生。明和六年（一七六九）住心院住職となる。文化三年（一八〇六）死去。住心院は全国の修験道本山派山伏を統べる聖護院門跡の院家先達として、全国的に広大な霞を所有していた。

《解説》

関ヶ原の戦いに際し、本山派修験（ほんざんはしゅげん、聖護院を本山とする修験道）の極楽院（高崎市箕郷町和田山）が、戦勝を祈願した祈禱札と扇・墨を家康に届けたことに対して、家康が全阿弥を通じて返礼した文書の写と思われる。この文書の年次は不明だが、包紙に「於関ヶ原御陣中被下候、権現様御黒印」とあることから慶長五年（一六〇〇）と考えられる。当時家康は関東から上方に向けて西上中で、九月十五日石田三成率いる西軍と関ヶ原で激突しているので、その直前の史料となる。多くの戦国大名は合戦に際し、領国の寺院に対して戦勝祈願を課していたが、家康の領国となった上野国においても例外ではなかったことがうかがえる。

取次ぎを担った「全阿弥」は本名を内田正次といい、家康の初期の宗教行政に於いて重要な役割を果たした人物である。天正一八年（一五九〇）の家康の関東入国以降、上野国など関東の寺社行政も担当していたことがうかがえる。

なお「御黒印」と記載してあることから、家康文書の原本ではない。「本文の通り相違なきもの也」と、江戸後期の住心院住職賞珉の公認のもと写し取られていることから、比較的良質な家康文書の写しであると考えられる。